

記録
フィルム
カラー／37分

■企画

国立歴史民俗博物館

■協力

文化庁

■特別協力

五所川原市 笠井キヨ 笹森建英(弘前大学教育学部教授)

■撮影協力

青森県教育委員会
弘前市教育委員会
五所川原市教育委員会
金木町教育委員会
鶴田町 青森県立郷土館 弘前市立図書館 川倉賽の河原講中 霊場恐山寺務所 弘前市／長勝寺 報恩寺 専修寺
五所川原市桜田の皆さん 弘前市小栗山の皆さん 鶴田町 石村智徳

スタッフ

■製作

村山和雄

■脚本・演出

大島善助

■撮影

山屋恵司

■照明

水村富雄

■現地録音

樋口克雄

■編集

近藤光雄

■ネガ編集

加納宗子

■音楽

長沢勝俊

■解説

山本 圭

文部省選定 第32回日本産業映画・ビデオコンクール日本産業映画ビデオ賞 1994年教育映画祭優秀作品賞
1994年キネマ旬報文化映画ベスト・テン第10位

今や消滅の危機に瀕している民間巫女(みこ)の実態を、津軽地方を中心に、イタコの伝統的な巫業の様相を、人々の触れ合いと宗教的風土の中で丹念に記録していく。



青森県下北半島の霊場・恐山(おそれざん)の大祭の日。各地から集まってきたイタコたちが「口寄せ」をする。イタコは、死者の霊の「口寄せ」を主な仕事としてきた。

老イタコの笠井キヨさん(79歳)は、幼い頃視力を失い、師匠の家に弟子入りしたのは14歳の時。厳しい修業に耐えて、15歳で一本立ち(ミアガリ)した。イタコは、仕事のことを「商売」という。自宅に祭壇を設け、ふだんはそこを仕事場にしているが、呼ばれればどこにでも出かけて「口寄せ」をする。春秋のオシラサマ(東北地方の民間信仰)の祭日には、「オシラサマ遊ばせ」も行う。しかし、このようなイタコの仕事をするには、江戸時代には現在の弘前市にある報恩寺が発行する許可証(カンサツ)が必要であった。明治時代には、行政から「イタコの所業一切禁止」の布告が出された。それでもイタコを求める声が絶えず、その仕事は続いてきた。

たび重なる凶作・飢饉にみまわれてきた津軽の風土を生き抜く人々にとって、イタコは必要で、イタコの語る死者の言葉は、この世で生きていく人々の心の灯であった。青森県西部、津軽地方の人々の暮らしの中で大切に守り伝えられてきたイタコ。今は、後継者もなく減少の一途を辿る。